

張赫宙作・日本語版「春香伝」上演(1938年) からみる植民地の文化越境*

：座談会「朝鮮文化の将来」をめぐる

曹恩美(조은미) _ 東京外国語大学国際日本研究センター特任研究員

目 次

- I. はじめに
- II. 日本語版「春香伝」上演前後の張赫宙と村山知義の活動
- III. 張赫宙と村山知義における日本語版「春香伝」上演の意味
- IV. 座談会「朝鮮文化の将来」の亀裂、そして張赫宙
- V. むすび

要旨

本稿は、朝鮮の代表的な古典「春香伝」が張赫宙により日本語演劇として翻案され、村山知義が率いる新協劇団により上演されたことに注目して、「植民地帝国日本」における相互交通や文化の越境についてさぐった。

日本語版「春香伝」上演を取り上げたこれまでの先行研究では、張赫宙による植民地の朝鮮語から帝国の日本語への翻訳の政治性に関心が集中し、その多くが帝国日本の「内鮮一体」を扇動するいわゆる「国策もの」として張赫宙作・村山知義

* 本稿は、博士論文『張赫宙の日本語文学研究—植民地朝鮮／帝国日本のはざままで』（東京外国語大学、2016年9月）の第2章「越境／交通する文化空間—「春香伝」上演（1938年）をめぐる」の一部にもとづいて加筆・修正したものである。また、その概要は、2010年10月3日に天理大学（奈良）で開催された第61回朝鮮学会大会で研究発表をおこなった。

演出の「春香伝」上演を論じてきた。

本稿では、主に新協劇団発行の一次資料にもとづいて、「春香伝」上演前後における張赫宙と村山知義の活動、そして、張赫宙と村山知義における日本語版「春香伝」上演の意味について考察した。

さらに、本稿では、日本語版「春香伝」上演から派生し、張赫宙が朝鮮文壇を離れる臨界点ともなった座談会「朝鮮文化の将来」を取り上げ、植民地と帝国における文化の相互交通について考えた。座談会「朝鮮文化の将来」の考察からは、張赫宙による朝鮮の古典「春香伝」の翻訳は、植民地支配に拘束されながらも、日本に朝鮮文化を移植することによって、朝鮮が帝国日本によって包摂されようとする「一方的な同化」を拒否し、朝鮮文化と日本文化との「相互交通」を図る試みであったことを明らかにした。

キーワード

張赫宙(장혁주)、春香傳(춘향전)、座談会「朝鮮文化の将来」、帝国と植民地の文化越境

1.はじめに

張赫宙作・日本語版「春香伝」¹⁾は、新協劇団にとって最初の朝鮮ものとして、1938年3月23日から5月3日にかけて東京、大阪、京都において、10月25日から11月8日にかけて朝鮮の京城、平壤、大田、群山、全州、大邱、釜山で上演された²⁾。

-
- 1) 張赫宙作による日本語版の「春香伝」は、「春香伝—六幕十五場」『新潮』(新潮社、1938年3月)、小説戯曲集『春香伝』(新潮社、1938年4月)、「春香伝」(『協和事業』1940年8月・11月・12月)、朝鮮古典物語『沈清伝・春香伝』(赤塚書房、1941年2月)、『春香伝』(新潮社、1941年7月)などが挙げられる。
 - 2) 公演日程の詳細をみると、1938年3月23日から4月14日まで築地小劇場、4月27日から30日まで大阪朝日会館、5月1日から3日まで京都朝日会館で上演され、10月25日

www.kci.go.kr

その際、帝国日本と植民地朝鮮の文学者らが膝を交える形で京城において座談会が開かれた。その後、座談会の記録は、朝鮮では『京城日報』に「朝鮮文化の将来と現在」、日本においては、雑誌『文学界』に「朝鮮文化の将来」というタイトルでそれぞれ掲載された³⁾。

新協劇団の日本語版「春香伝」は、植民地作家「張赫宙」が描いた戯曲が宗主国・日本「内地」において上演されたこと、また、日本側と朝鮮側双方からの協力・参加を前提とした企画であること、さらに、演出者・村山知義が目指していた「最も朝鮮的」⁴⁾であることへの希求が、時には植民地／帝国という空間の異質さを生みだした。その中には朝鮮人同士のすれ違い、そして互いに朝鮮文化復興という同じ求心点を抱えながらも一つの円になることはなく、齟齬をきたしてしまうという植民地的状況が刻み込まれていた。

筆者は、拙稿「張赫宙作・村山知義演出「春香伝」上演(1938年)論—朝鮮人のプロレタリア文化運動と新協劇団の関わりの中から—」⁵⁾において、主に新協劇団発行の一次資料にもとづいて、「春香伝」上演に関わる具体的な協力関係、その形成過程に焦点をしばって検討した。その結果、「春香

から27日まで朝鮮の京城(府民館)、10月29日から30日まで平壤(金千代座)、11月1日には大田(大田劇場)、2日には全州(帝国館)、3日には群山(群山劇場)、5日、6日には大邱(大邱劇場)、7日、8日には釜山(釜山太平館)で上演された。北橋義好編「年度別演目一覧表」『新協劇団5周年記念出版』新協劇団発行、1939年11月25日、3頁。

- 3) 座談会「朝鮮文化の将来と現在」『京城日報』1938年11月29日、30日、12月2日、6日~8日(全6回)。日本においては、座談会「朝鮮文化の将来」『文学界』1939年1月号。本稿での引用と頁数、座談会のタイトルは、雑誌『文学界』掲載の「朝鮮文化の将来」を用いる。
- 4) 村山知義「演出者の言葉」『テアトロパンフレット第七輯—朝鮮古典春香伝춘향전六幕十二場』(以下、『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』と略す)テアトロ社、1938年3月23日、9頁。
- 5) 拙稿「張赫宙作・村山知義演出「春香伝」上演(1938年)論—朝鮮人のプロレタリア文化運動と新協劇団の関わりの中から—」朝鮮学会『朝鮮学報』254、2020年1月、東京。

伝」上演に際し、在日朝鮮人のプロレタリア演劇運動の中核的な役割を果たしていた安英一が演出助手として活躍していたのをはじめ、文学者の金史良、労働運動家の金浩永らの関わりを明らかにして、植民地朝鮮／帝国日本の文学者・文化運動家のさまざまな協力関係によって「春香伝」上演が実現したことを明らかにした。

また、さらに、日本語版「春香伝」テキストと公演台本についても検討を行った。これまでの先行研究では、上演において実際に使われた新協劇団の公演台本や演出ノートなどの記録が現在に至るまで発見されていない現状から、張赫宙の最初の雑誌掲載作品「春香伝六幕十五場」(『新潮』1938年3月)を公演台本に準ずるものとみなすのが一般的であった。しかし、実際の公演台本は、村山らの改訂を反映させた単行本小説戯曲集『春香伝』(新潮社、1938年4月)にもとづくものであろうことも考察した⁶⁾。

本稿はその延長線上にあるものとして、「春香伝」の翻訳にあたった当の張赫宙と新協劇団の中心となった村山知義、日本語版「春香伝」が巻き起こした「座談会」に焦点を当てて考察を進めたい。

張赫宙は1938年、日本語版「春香伝」上演の後、帝国日本と植民地朝鮮の狭間で板挟みとなり、その翌年の2月、評論「朝鮮の知識人に訴ふ」⁷⁾を発表することになる。この、刺激的な一文において、「座談会」での朝鮮人文学者らの「春香伝」翻訳不可能論に対する批判を展開していた。

戦後、林鍾国⁸⁾をはじめとする先行研究では、この評論により事実上、

6) 張赫宙における日本語版「春香伝」テキストと公演台本については、拙稿「張赫宙作・村山知義演出「春香伝」上演(1938年)論—朝鮮人のプロレタリア文化運動と新協劇団の関わりの中から—」(前掲)を、参照されたい。

7) 張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」『文芸』1939年2月号。のちに、雑誌『三千里』1939年4月号に「朝鮮の知識層に訴ふ」の題で朝鮮語掲載。

8) 임종국『친일문학론』(평화출판사1966年)。増補版・임종국『친일문학론』(민족문제

張赫宙の朝鮮語の放棄声明としてみなし、この時点からいわゆる「転向」したとしている。言わば、張赫宙における日本語版「春香伝」上演、そして座談会「朝鮮文化の将来」は、彼の戦前の文学活動において一つの臨界点ともなる出来事であったと言えよう。

先行研究としては、まず、最も早い時期に注目した白川豊の「張赫宙作戯曲〈春香伝〉とその上演(1938年)」⁹⁾が挙げられる。白川は、張赫宙に焦点を当てながら、朝鮮と日本の双方の資料の実証的な調査を通じて「春香伝」上演の全貌を明らかにした。白川は、結果的には「内地」公演はそれらの主観的な使命感や良心が、時局という大きな流れに取り込まれていくさまを典型的に示して¹⁰⁾いたことを指摘している。

また、戯曲研究の領域では、민병욱「村山知義演出〈春香伝〉公演の社会学的研究」、「張赫宙の日本語体戯曲〈春香伝〉研究」がある¹¹⁾。민の論考は、「春香伝」を近代劇の方向性を模索した試みとして評価しながら、演劇社会学の視座から台本の構造を検討し、結果的には失敗に終わってしまった日本語公演であったと指摘している。その一方で、張赫宙の戯曲「春香伝」テキストは、戯曲の普遍的な構造(出会い—別れ—再会)より、激情的構造化(刺激—苦痛—刑罰)に焦点を当て、そこには朝鮮の現実への道徳的な批判が内在されていたとも述べている。

そのほか、「春香伝」上演を取り上げたこれまでの先行研究では、その

연구소, 2002年)。日本語翻訳版としては、林鐘国著、大村益夫訳『親日文学論』(高麗書林, 1976年)がある。本書では翻訳版を参照した。

9) 白川豊「張赫宙作戯曲〈春香伝〉とその上演(1938年)」『植民地期朝鮮の作家と日本』大学教育出版, 1995年(初出「張赫宙作〈春香傳〉とその上演(一九三八)をめぐって」『史淵』第126号, 1989年3月)。

10) 白川豊「張赫宙作戯曲〈春香伝〉とその上演(1938年)」前掲, 215頁。

11) 민병욱「村山知義 연출〈춘향전〉의 공연 사회학적 연구」(『한국문학논총』33, 2003年4月)、「장혁주의 일어체 희곡〈춘향전〉 연구」(『한국문학논총』48, 2008年4月)。

多くが張赫宙による植民地の朝鮮語から帝国の日本語への翻訳の政治性に関心が集中し、帝国日本の「内鮮一体」を扇動するいわゆる「国策もの」として新協劇団の日本語版「春香伝」上演を論じてきた¹²⁾。

他方で、村山の芸術観や思想性及び朝鮮との関わりについて考察した論考の中で、「春香伝」公演を取り上げているものとしては、鄭大成¹³⁾、차승기¹⁴⁾、外村大¹⁵⁾が挙げられる。

その中、新協劇団「春香伝」公演に関する当時の新聞、雑誌や演劇レビューなどに注目して論じた外村の論考では、「春香伝」は日本人が朝鮮文化に接する機会を作っただけではなく、在日朝鮮人において彼らの朝鮮文化に対する誇らしさが確認され、当時、イデオロギーの枠を超えた在日朝鮮人の生活や意識に根ざし、日本の市民に訴える文化活動の存在、あるいはその可能性や重要性を再認識する契機になったと評価している¹⁶⁾。

12) 張赫宙作・新協劇団の日本語版「春香伝」上演や、劇評などの言説に焦点を当てた論考として、趙寛子「国民文学と世界文学」(『思想史研究』第3号、日本思想史・思想論研究会、2003年3月)、백현미「신민족적 전통과 동양적 전통—1930년대 후반 경성과 동경에서의〈춘향전〉공연을 중심으로」(『현대문학이론연구』23, 2004年12月)、서석배·이선영번역「신뢰할 수 없는 번역: 1938년 일본어 연극 춘향전」(『아세아연구』51—4, 2008年12月)、문경연「1930년대 말 실험(新協)의「춘향전」공연관련 좌담회 연구」(『우리어문연구』36, 2010年1月)、「일제말기 극단 실험(新協)의〈춘향전〉공연 양상과 문화 횡단의 정치성」(『한국연극학』40, 2010年4月)、「春香伝」テキストに関する論考としては、김계자「장혁주의 「춘향전」을 통해 본 제국과 식민지의 변주」(『비교문화연구』38, 2015年3月)、이응수·이정옥·김효숙「장혁주 「춘향전」의 번역—사회적 반항과 개인적 측면을 중심으로」(『일본어어문화』39, 2017年6月)가挙げれる。

13) 鄭大成「8·15前夜の〈超境的〉知識人—戦争協力と〈内的亡命〉の間—朝鮮における村山知義」(『社会文学』22号、2005年)。

14) 차승기「제국의 이상블라주와 사건의 정치학—무라야마 도모요시와 조선」(『동방학지』연세대학교 국학연구원, 2013年3月、(『아시아 이벤트』그린비, 2013年、所収)。

15) 外村大「朝鮮民族にとっての一九三八年・新協劇団「春香伝」在日朝鮮人運動史研究会編『在日朝鮮人史研究』48号、緑蔭書房、2018年10月。

16) 先行研究及び、当時、新協劇団の日本語版「春香伝」上演を取り巻く政治状況については、拙稿「張赫宙作・村山知義演出「春香伝」上演(1938年)論—朝鮮人のプロ

本稿では、帝国日本に協力した行為として断罪されてきた張赫宙による朝鮮文学の日本語への翻訳という営みは、宗主国の日本文学者と植民地の朝鮮人文学者の狭間で何をもたらしたのか。また、そこにはどのような矛盾や葛藤が存在したのかを、日本語版「春香伝」上演を媒介にして読むことを試み、戯曲「春香伝」翻訳が張赫宙にどのような影響を与えたかも含め、そのあり方を探ってみたい。

II.日本語版「春香伝」上演前後の張赫宙と村山知義の活動

ここではまず、「春香伝」が上演される前後の張赫宙と村山知義の活動を追いながら、両者における日本語版「春香伝」上演の意味を考えてみたい。

張赫宙(1905-1997)は、1932年4月「餓鬼道」で雑誌『改造』の第5回懸賞創作に入選し、日本文壇における最初の朝鮮人作家としてデビューする。日本文壇でのデビュー以降、張赫宙は植民地朝鮮に生活の場をおきながら、朝鮮と日本の間を往復する形で文学活動を営む。しかしその後、1936年6月にこれまでの朝鮮での生活を清算して日本へ移住し、その活動の拠点を帝国の本国「内地」に移す。

張赫宙は東京に移住した以降、在日朝鮮人社会を現場で体験していた。東京移住後、真っ先に向かったのが芝浦月見町、深川、荒川区三河島、豊島区日の出町、多摩川の砂利掘、調布町などにある「朝鮮人聚落」であったことは、そのことを窺わせる有力な材料になるだろう¹⁷⁾。

このような関心の持ちかたは、在朝鮮の朝鮮人作家、在日本の日本人・

レタリア文化運動と新協劇団の関わりの中から一(前掲)を、参照。

17) 張赫宙「朝鮮人聚落に行く」『改造』1937年6月号。なお、実際の取材は1937年4月、カメラマンの山村一平と同行したとされる。

朝鮮人作家を含めてももっとも早い時期のものである。在日朝鮮人の居住地を取材したルポルタージュ「朝鮮人聚落を行く」¹⁸⁾において、在日朝鮮人の集団居住地はまさに「太陽のない街」¹⁹⁾として張赫宙の目に映る。彼がここで言う「太陽のない街」とは、1929年6月号から雑誌『戦旗』に連載された徳永直のいわゆる「共同印刷争議」を題材にした作品「太陽のない街」を、当時の張赫宙は東京の朝鮮人集団居住地を取材しながら意識し、重ね合わせたものであろう。

他方、この時期における村山知義の活動を植民地朝鮮との関わりから見てみよう。

村山は1932年に治安維持法違反によって検挙され、1933年12月に保釈される。翌年の1934年に総合演劇雑誌『テアトロ』が創刊されると表紙デザインや劇評を手がける。同年7月にはプロット(日本プロレタリア演劇同盟)が解散し、8月には村山による「新劇団大同団結論」²⁰⁾の提唱を受けて、中央劇場、新築地劇場の一部、美術座による合同劇団として新協劇団が結成され、以後、新協劇団の中心人物として、主に演出面で活動するようになる²¹⁾。

新協劇団の第1回目の公演では村山知義・脚色、久保栄・演出の「夜明け前第1部」(島崎藤村原作)が1934年11月10日から30日まで築地小劇場で上演される。1937年7月に盧溝橋で日中両軍が衝突して日中戦争が勃発し、状況は一気に戦争へと突き進む。その翌年1938年3月、新協劇団の第22演目、張赫宙作「春香伝」が村山の演出で築地小劇場において上演される。

18) 張赫宙「朝鮮人聚落を行く」前掲。

19) 張赫宙「朝鮮人聚落を行く」前掲、53頁。

20) 村山知義「新劇団大同団結の提唱」『改造』16巻10号、1934年9月。

21) 内務省警保局編『社会運動の状況11昭和十四年』三一書房、1972年、158頁。

村山は、同月に出版された張赫宙著『春香伝』(新潮社)の装幀を手がけている²²⁾。

村山は、張赫宙作・戯曲「春香伝」上演に続いて、1940年1月11日から13日には日比谷公会堂で「趙沢元新作舞踏公演」村山知義作・演出、バレエ「鶴」、村山原案「春香伝」を上演している²³⁾。舞踊家・趙沢元と村山との関わりは、1945年3月に村山が朝鮮に滞在した際に、趙沢元の家で長期間泊まっていたことが知られている²⁴⁾。趙沢元と新協劇団との関わりについては、1939年11月17日、有楽町で開催された新協劇団創立5周年記念「観客の夕」において、趙沢元は舞踊「袈婆胡蝶(儂舞)」「アンゼル(シヨパン)」を披露している²⁵⁾。

1940年8月19日、新協劇団の村山知義、安英一、久保栄、久坂栄二郎、滝沢修、秋田雨雀、三島雅夫、信欣三、赤木蘭子など「春香伝」上演にも関わったメンバー26名が、新劇の運命を左右したと言われる「新劇事件」²⁶⁾に巻き込まれ、当局により逮捕される。この検挙により、新協劇団は解散を余儀なくされる。この検挙ののち1942年末に保釈され、1944年4月、執行猶予付きの判決を受け、執筆や演出などの活動が禁止になった村山は、1945年3月22日、朝鮮に渡る。

22) 村山知義研究会編『村山知義の宇宙』読売新聞社、美術館連絡協議会、2012年、230~231頁。

23) 村山知義研究会編『村山知義の宇宙』前掲、232頁。

24) 村山知義「朝鮮での八・一五」『世界』1950年8月、66頁。

25) 内務省警保局編『社会運動の状況11昭和十四年』前掲、165頁。

26) 「新劇事件」とは、1940年8月19日、警視庁特高課が「新協劇団」や「新築地劇団」などの劇団員100人以上を一斉に検挙した事件である。その逮捕は、支援組織や後援会のメンバーらにも及び、劇団が強制的に解散させられた事件である。「新劇事件」に関する詳細は、大笹吉雄「新劇事件とその後」(『日本現代演劇史昭和戦中篇I』百水社、1993年)、菅井幸雄「千田是也の「手記」をめぐって—1930年代の新劇運動の特徴」(『明治大学人文科学研究紀要』38、1995年)、参照。

朝鮮では、村山演出・舞台装置の「検察官」(ゴーゴリ)を京城・革命劇場で上演している。8月1日から6日には京城の三越デパートで第2回人物画個人展覧会を開き、同月、旅行で朝鮮から満州に渡る²⁷⁾。この時、間島、熱河、華北などを旅行中の張赫宙と奉天で一緒に撮った写真や、1945年平壤・国際ホテルにて崔承喜と撮った写真から、当時の村山の朝鮮人との関わりや旅程を窺い知ることができる²⁸⁾。そして、敗戦を朝鮮で迎え、1945年12月、朝鮮から帰国する。

戦後まもなく、村山は1947年8月16日から31日まで、作・張赫宙、演出・佐々木陸、舞台装置・村山知義「春香伝」を、新宿帝都座小劇場において再演する。翌年、11月20日から26日には村山知義作・演出・衣装・舞台装置のオペラ「春香伝」(高木東六作曲・藤原歌劇団)が有楽座で上演される。1948年6月には村山が朝鮮で経験したこと、朝鮮人との交流などを題材に描いた『明姫:村山知義作品集』(郷土書房)を刊行している。

以上のように、村山の朝鮮との関わり、特に「春香伝」とのかかわりは深く、その繋がりには1930年代前後から始まり、戦後まで続いていたことがわかる。では、村山知義が朝鮮人や朝鮮にこだわり続けたのはなぜだったのだろうか。

27) 村山知義研究会編『村山知義の宇宙』前掲、233頁。なお、村山知義「朝鮮での八一五」(前掲)67頁では8月でなく、7月に満洲・新京旅行と記されている。

28) 村山知義研究会編『村山知義の宇宙』前掲、233頁。

III.張赫宙と村山知義における日本語版「春香伝」上演の意味

新協劇団の日本語版「春香伝」上演は、村山によれば、「朝鮮の文化と云ふものは、歴史的に見れば、日本文化の母体の一つ」²⁹⁾である、しかし「内地ではそれを知らないのであります。それでは非常にいけない、内地に朝鮮の文化、芸術を紹介したい」³⁰⁾という思いと、もう一つには、以下のように日本に在住している在日朝鮮人に向けた思いがあった。

内地に朝鮮の人が大勢居ます。それで以前は、朝鮮の人が朝鮮語でやる芝居もあつたのですが、今ではそんな劇団がみんなつぶれて了ひなくなつて居ます。さう云ふ人達にも、朝鮮の良い芸術を見せて上げたいと考へ、それで、何かよい戯曲がないかと、張赫宙君に、朝鮮をテーマにした戯曲を書いて呉れるやうに頼んで居りました。すると、張君が「春香伝」(6幕15場)を書いて呉れました³¹⁾。

ここからわかるように、村山は日本に在住している在日朝鮮人や、朝鮮語を知らない日本の民衆に朝鮮文化、芸術を紹介したいと考へ、「内地朝鮮人半、日本人半」を観客層として「両方共に感銘を与える」ことを目指し、「内地で内地人の劇団が朝鮮の芝居をやると云ふのは、これが最初ですから是非とも成功させたいと努力」³²⁾していたことをアピールしている。村山の言葉どおり新協劇団の日本語版「春香伝」上演は、在日朝鮮人と朝鮮語を知らない日本民衆のために、日本の劇団である新協が日本人の

29) 村山知義「「春香伝」の築地上演に就いて」『朝鮮及び満洲』364号、朝鮮雜誌社、1938年、59頁。

30) 村山知義「「春香伝」の築地上演に就いて」前掲、59頁。

31) 村山知義「「春香伝」の築地上演に就いて」前掲、59頁。

32) 村山知義「「春香伝」の築地上演に就いて」前掲、60頁。

俳優により、日本語で、企画したということになる。

また、村山知義は『テアトロパンフレット春香伝』において「演出者の言葉」として次のように述べている。

前々から、朝鮮には興味を持って居り、東京で見られた限りの朝鮮の演劇や映画や舞踊やはのがさず、本所公会堂の朝鮮のレコード音楽家の演奏会にまで出掛けたほどだったし、朝鮮人の友達も多勢ある³³⁾。

このように、朝鮮民族芸術、そして、朝鮮語演劇に対する村山の高い関心は実践的なものであり、自ら積極的に足を運び、朝鮮人による朝鮮語公演に観衆として参加していた。特に、1937年6月に築地小劇場において「柳致眞君が朝鮮語で書いたものを、学生芸術座と云ふ朝鮮人の学生の劇団が」上演し、「私はそれを見て感心しました」³⁴⁾と述べるなど観客席で朝鮮人らの民族芸術に対する熱い思いを強く感じ、この時期に日本語で日本民衆に「朝鮮もの」を上演してみたいという気持ちを抱くようになったのであろう³⁵⁾。

そして、村山によれば、新協劇団における「春香伝」上演の意義は、「朝鮮の風俗、人情及び文化的な伝統を紹介したこと」にあり³⁶⁾、日本で新劇が始まってから最初の朝鮮古典の紹介であることをアピールしながら、「この上演を機会に、朝鮮文化に対する諸君の関心を高めることができ

33) 村山知義「演出者の言葉—戯曲について」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、10頁。

34) 村山知義「春香伝」の築地上演に就いて」『朝鮮及び満洲』前掲、59頁。

35) 白川豊の調査によれば、東京学生芸術座は1937年6月22、23日、築地小劇場において、柳致眞脚色・全4幕5場の「春香伝」上演を2回にかけて行ったとされる。白川豊「張赫宙作戯曲<春香伝>とその上演(1938年)」前掲、192頁。

36) 村山知義「春香伝」余談—京城でも上演がしたい」『京城日報』1938年5月31日。

ばよい」³⁷⁾と上演に当たっての抱負を述べている。

村山は、「春香伝」の演出に際して以下のような指標を立てていた。

演出に際して私は4つの指標を立てた。1、正義と貞潔と美への憧憬が、古典的な距離を失ふことなく、しかも同時に現実的な力をもつて訴えかけて来ること。2、最も朝鮮的であること。3、古い味を持つこと。4、美しくあること。1については説明するまでもない。2については真に朝鮮的であることが、同時にこの作の内容に普遍的な力を與へるものであることが認められなくてはならない。その上に、この上演は、単に直接的感動を與へるといふことのみでなく、朝鮮の文化、芸術的伝統、民族性、風俗等を日本に紹介するといふことを目的にしてある。出来るだけ、朝鮮的であるために、われわれはまた出来るだけの努力を払った³⁸⁾。

また、演技については、歌舞伎のエスプリを取り入れ、それと朝鮮的なものとの融合を目指していた³⁹⁾。村山の演出の指標の中、「最も朝鮮的」、「真に朝鮮的」であることについて新協劇団の団員は、京城に渡り「春香伝」の下調べや、朝鮮文化の見学旅行をおこない、現場の朝鮮の文化人との様々な交流とその援助を受けていた⁴⁰⁾。

一方、張赫宙が書き下ろした「春香伝」脚本にたいして村山は、まずそれは、「観客として主として内地人を意識してゐる」と述べつつも、「春香

37) 村山知義「春香伝演出」『「春香伝」プログラム』新協劇団、1938年。村山知義研究会編『村山知義の宇宙』前掲、216頁、所収。

38) 村山知義「演出者の言葉—演出について」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、9~10頁。

39) 村山知義「演出者の言葉—演技について」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、11頁。

40) 村山知義「演出者の言葉—演出について」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、10頁。詳細は、拙稿「張赫宙作 村山知義演出「春香伝」上演(1938年)論—朝鮮人のプロレタリア文化運動と新協劇団の関わりの中から—」(前掲)、参照。

伝」を生んだ朝鮮民族を対象にするか、「小説や映画でお馴染みのアメリカ人やヨーロッパ人よりも、内地人にとって、不思議なことに朝鮮はずつと縁の遠い存在」⁴¹⁾の「内地」人を対象にするかで、脚本に大きな相違が生じることを強調しながら、「内地人と朝鮮人と、両方を観客に期待」する「春香伝」は「両者を満足させるやうな戯曲であることが必要で」と述べている⁴²⁾。

つづいて村山は、張赫宙の脚本は「自身朝鮮人であり、春香伝に親炙してあつた、内地に長く住み、内地人についても深く知り、巧みな、芸術的な日本語で、内地で上演されることを予想して書いたもの」と述べ、次のように評価している。

とまれ、張君の戯曲は、今度の上演の目的によく適ひ、「春香伝」の持つ正義と貞潔と美への憧憬を描いて遺憾なく、その美しさにおいて独特であり、その格調の古典的にして同時に近代적であり、朝鮮的にして同時に内地적である点においてまた独特である⁴³⁾。

さらに、村山は朝鮮側にたいして「原作の持つ語彙の豊富さとか、スリリングな場面の欠除とかは、一つは言葉を異にしたものへの移植であることから」⁴⁴⁾やむを得ないものであることが承認されるよう願う、と述べている。

41) 村山知義「演出者の言葉—戯曲について」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、7頁。

42) 村山知義「演出者の言葉—戯曲について」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、7頁。

43) 村山知義「演出者の言葉—戯曲について」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、9頁。

44) 村山知義「演出者の言葉—戯曲について」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、9頁。

こうした村山知義の日本語版「春香伝」上演の企画は当時、多くの植民地朝鮮文化人に共感され、様々な協力を得て生まれた。この際の村山の植民地朝鮮人との交流は、「春香伝」上演の後も継続され、張赫宙、村山知義、秋田雨雀、兪鎮午の共同編集による「全面的朝鮮文学の反訳集の企画」⁴⁵⁾であった『朝鮮文学選集』全3巻(赤塚書房、1940年)⁴⁶⁾の刊行にもつながっていくのである。

他方、作家・張赫宙にとっての日本語版「春香伝」上演の意義とはどのようなものであったのだろうか。

まず、張赫宙は今回の「春香伝」上演は新劇であることを強調しながら「新劇「春香伝」は朝鮮人の中でも二十歳前の若い人達は「春香伝」と云ふ言葉は度々耳にしても、本当に読み聞き或は見る機会が少ない。[中略]私は此の二十歳前の若い朝鮮人と日本内地人や諸外国人が見て理解する事が出来る様に作劇する」⁴⁷⁾よう努めていたことを述べている。

「春香伝」の内地での上演を目指していたことから考えると、すでに東京に移住し在日朝鮮人としての出発点に立っていた彼にとって、ここで言う「二十歳前の若い朝鮮人」とは、まず内地で生まれ育った在日朝鮮人二世のことを示しているのだろう。当時、すでに在日朝鮮人の二世たちの社会も形成されており、日本における彼らの生活を取材し表現してきた張赫宙は、在日朝鮮人青年たちの帰属や文化の複雑さを感じつつ、日本において、朝鮮の芝居「春香伝」を見る機会がなかった若者たちに朝鮮文化を伝えたかったということを述べているのであろう。

一方、張赫宙における戯曲「春香伝」の脚本の創作背景はどのようなも

45) 張赫宙「現代朝鮮作家の素描」『文学案内』3巻2号、1937年2月、84頁。

46) 編著代表者・張赫宙『朝鮮文学選集』全3巻、赤塚書房、1940年。

47) 張赫宙「朝鮮と春香伝」『京城日報』1938年10月4日。

のだったのだろうか。

当初は、朝鮮人である張赫宙自身が「原作の朝鮮的な諸要素を持参」し、湯浅克衛が「日本語的な諸表現力を貸して」共同制作を目指していたが、実現しなかったと伝えられている⁴⁸⁾。その後、張赫宙は「春香伝」の「底には朝鮮民族全体の心が通つてゐ」⁴⁹⁾て、そこには「庶民階級の諧謔と特権階級への皮肉と諷刺」⁵⁰⁾が潜在的な要素として存在しており、それを上手く表現できるよう創作的な工夫に努めた点を強調し、翻訳というよりむしろ創作に近い戯曲「春香伝」となっていることをアピールしている。

また、作家・張赫宙が「内地」の観衆に求めていたものは、「この「春香伝」の、東京(並に京都、大阪)上演が、朝鮮を全般的に最も正しく理解する大きな動機になつてもらひたい」⁵¹⁾ことであると、当時観衆に配られた春香伝の『テアトロパンフレット』に綴られた内容からも理解できる。

ここで注目したいのが、「春香伝」において、登場人物のなかでも張赫宙が最も注意を払った人物が、「最も朝鮮的な、特異な存在」⁵²⁾である「房子」^{バンチャ}であったことである。張赫宙は、いわば民衆を表象すると言ってよい「最も朝鮮的な」人物・「房子」を「各場面に活躍させた」⁵³⁾と強調している。

実際に張赫宙の数々の「春香伝」著作の中でも房子の役割は大きく、^{ヤンバン}両班である夢龍のアドバイス役として活躍しており、実際の公演においても「房子」を演じた俳優の三島雅夫は、朝鮮公演では「東京で演つた時と

48) 張赫宙「春香伝について」『文芸首都』6巻3号、1938年3月号、109頁。

49) 張赫宙「後記」『春香伝—六幕十五場』『新潮』1938年3月号、68頁。

50) 張赫宙「後記」『春香伝』新潮社、1941年7月、147頁。

51) 張赫宙「春香伝の劇化」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、6頁。

52) 張赫宙「春香伝の劇化」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、4頁。

53) 張赫宙「春香伝の劇化」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、4頁。

は違つてあちら言葉〔朝鮮語—引用者注〕で唄を全部歌つた。それが大変見事で各地とも拍手喝采、素晴らしい人気⁵⁴⁾であつたという。

また、朝鮮の論客の一人である沈影は、当時、朝鮮において房子の役者として有名であつたが、彼が唯一絶賛したのが「房子」と「使道^{サート}」役であつた⁵⁵⁾。一方、日本公演においても、「三島雅夫の房子と小澤榮^{マア}を悪使道は傑作である」、「俳優の中では三嶋〔三島—引用者注〕雅夫の房子が一等の出来だつた」、「この作のアイロニーとユーモアは新使道と房子が受持ち」、「特に三嶋〔三島—引用者注〕雅夫の従者房子(パンチャ)を推賞する」⁵⁶⁾など、観衆の俳優評はほとんど房子に向けられ、これが絶賛されていた。

それでは、作家・張赫宙は「房子」と「使道^{サート}」という対立的な構造を露出させることで、読者・観衆に何を求めていたのであろうか。ここで、張赫宙の初期作品がプロレタリア文学の視点を持っていたことを想起したい。

たとえば、地主階級と日本帝国主義を告発し、苦しみにあえぐ朝鮮農民の現実が描かれている彼のデビュー作「餓鬼道」(『改造』1932年4月)、あるいは、新地主である日本人・迫田と日本人の農民移住者および日本の資本主義を批判している「迫田農場」(『文学クオタリイ』1932年6月)、さらに日本資本主義が朝鮮農村経済を侵していったことにより、故郷を追い出され満洲へと流れる窮乏な朝鮮農民の姿を描く「追はれる人々」(『改造』1932年10月)などが、彼がプロレタリア文学の視点を持って描いた作品としてあげられるだろう。

以上から考えると、張赫宙が彼の著作『春香伝』の「後記」で述べている

54) 信欣三「日記」『朝鮮の響き』月刊『新協劇団』第48号、1938年12月1日、3面。

55) 沈影「新協<春香伝>座談会」『批判』6巻12号、1938年12月、32頁。

56) 「春香伝」上演が捲起した波紋—都下各紙激賞」月刊『新協劇団』第37号、1938年4月1日、1面。

ように、「春香伝」では、朝鮮社会の身分制度である「使道」は権力、「房子」は小作人を意味しており、これは貧窮な朝鮮民衆、さらに朝鮮の地主、小作人の悪習や封建制におかれている朝鮮の現実を浮き彫りにし、それを登場人物「房子」をもって「庶民階級の諧謔と特権階級への皮肉と諷刺」⁵⁷⁾を示唆しているのではないだろうか。さらに言えば、作家・張赫宙は、彼の「春香伝」の各テキストの登場人物の中、「房子」と「使道」には、特別に朝鮮語読みのルビ「パンチャ」と「サート」が付いていることも付け加えておく。

事実、当時、日本と朝鮮における「春香伝」の座談会では、論客から、「両班を非常に虐待せる敏感的な雰囲気」や、「農民のうらみが少し多過ぎる」(鄭寅燮)⁵⁸⁾のではないかと、指摘されていた。また、「使道」は「どんなことがあつても、サートは一定の位があつて……併しその位に外れてゐたのです」(鄭寅燮)、「威厳を保たなければ……」(宋錫夏)⁵⁹⁾、しかも、「使道は全く人間らしくなく、ケダモノ〔原本は朝鮮語であるが、この部分だけが日本語の仮名表記—引用者注〕のよう」⁶⁰⁾(徐光霽)に描いており、「とても不快であった」(李曙卿)と指摘されていたのである⁶¹⁾。

以上からわかるように、日本語版「春香伝」上演は、張赫宙や村山知義が企図していた最も朝鮮的なるものという意図にもかかわらず、朝鮮側からは朝鮮的ではないものとして批判されていたことがうかがえる。

57) 張赫宙「後記」『春香伝』前掲、147頁。

58) 座談会「春香伝批判座談会」『テアトロ』5巻12号、1938年12月、69頁。

59) 座談会「春香伝批判座談会」『テアトロ』前掲、75頁。

60) 座談会「新協春香伝座談会」『批判』前掲、32頁。

61) 座談会「新協春香伝座談会」『批判』前掲、32頁。

IV.座談会「朝鮮文化の将来」の亀裂、そして張赫宙

張赫宙作・日本語版「春香伝」上演を契機に座談会「朝鮮文化の将来」が開かれた。前述の通り、この記録は日本では雑誌『文学界』1939年1月号に「朝鮮文化の将来」と題し、朝鮮においては1938年11月29日から12月8日(全6回)にかけ『京城日報』に「朝鮮文化の将来と現在」と題し掲載された。内容においては、所々に異同が見られるものの、ほぼ同内容で、かつ同時期に朝鮮・日本の読者が目にすることになった。

座談会「朝鮮文化の将来」は、その後、朝鮮において文学の創作言語をめぐる論争を巻き起こすことになる⁶²⁾。座談会「朝鮮文化の将来」については、これまでの先行研究では、日本側の出席者として参加していた林房雄の発言がピックアップされ、朝鮮語抹殺政策の代表的な言説と見なす一方、近年では朝鮮の『京城日報』掲載の「朝鮮文化の将来と現在」、そして日本の雑誌『文学界』に掲載された「朝鮮文化の将来」という、朝鮮と日本の雑誌メディアに注目して、転載の問題や、修正・加筆の問題、二つのテキストの間の異同を解説する様々な解釈が出されている⁶³⁾。

本稿では、日本側の出席者として参加していた「張赫宙」の「春香伝」の

62) この時期の植民地朝鮮の国語政策論争については、윤대석『식민지 국민문학론』亦楽、2006年、参照。

63) 転載の問題については、金允植(白川豊訳)「国民国家の文学観からみた二重言語創作の問題—解放前における朝鮮作家の日本語による創作について」(『朝鮮学報』第186号、朝鮮学会、2003年)、田村栄章「1939年朝鮮植民地文学の転換点」(『日本語文学』20集、2004年)。また、朝鮮と日本の雑誌メディアの異同に注目して、その間の亀裂を解説する論考については、권나영「어긋난 조우와 갈등하는 욕망들의 검열」(韓国学世界化事業団・延世大学校国学研究院編『일제 식민지시기 새로 읽기』혜안、2007年)、신지영『不/在의 시대』(소명출판、2012年)、박광현「경성좌담회 재독」(『植民地朝鮮の文学・文化と日本語の言説空間(2)』国際シンポジウム資料集、新潟県立大学、2014年7月6日)を参照。

翻訳をめぐる言説に注目したい。

座談会「朝鮮文化の将来」は、渡満途上、京城に立ち寄った林房雄が、「春香伝」の朝鮮上演を控え京城に滞在していた張赫宙、村山知義、秋田雨雀らと合流し、企画された。尚、張らは当日、府民館における京城YMC A主催の文芸講演が開催される予定があり、その合間に出席したものとされる⁶⁴⁾。

座談会では、林房雄が冒頭で「内地ではなにも朝鮮については知らない」⁶⁵⁾という現状を述べるとともに、この座談会が「朝鮮文化の将来と現在」あるいは、「文化に於ける内鮮一体の途はどこにあるか」について遠慮なく話し合う目的を持つと述べている。その趣旨に従い、座談会は以下の5つの小テーマ、「朝鮮の雑誌」「朝鮮の演劇」「春香伝」の翻訳「朝鮮語の文学」「文学の取締り」を設定して進められた⁶⁶⁾。

そのなかで注目をひくのは、「春香伝」の日本語翻訳の問題について交わされた対話である。朝鮮側の鄭芝溶による、朝鮮にはいま誇りを持つような芸術は何もないという発言をうけて、村山は、現在朝鮮の文化がなぜこのように荒廃しているのか、その点をはっきりさせなければ、これからも発達し得ないとして、今のうちに朝鮮の文化をどうすれば保存・発達させることができるのかを話し合わなければならないと述べる。そこで、張赫宙は「春香伝」について語り始め、言語をめぐる論争が展開する。

張赫宙：過去の朝鮮、現在の朝鮮を題材にした戯曲を内地の劇界で上

64) 「二十四日府民館で文芸講演会—秋田、村山、張氏起つ」『京城日報』1938年10月24日付。

65) 座談会「朝鮮文化の将来」前掲、272頁。

66) 張赫宙、村山知義、秋田雨雀は小テーマ「朝鮮語の文学」以降には、京城YMC A主催の文芸講演に出演するため退席していた。

演することゝもう一つ、朝鮮語のものを内地語に翻訳したり脚色したりして、内地人に紹介する、この二つのことは、われわれが是非やるべきことだと思ひます。〔中略〕さういふ意味で内地語で書いた「春香伝」をやったのです。

俞鎮午：それが難しい。

林房雄：翻訳文だからですか？

林 和：そうです。

金文輯：翻訳にしたら三文の価値もないのです。

林 和：あの持味がなくなります。

林房雄：それでは翻訳不可能論ぢやないですか。

翻訳には翻訳の使命が有りますよ。

林 和：併し「春香伝」の性格は内地語では到底……

鄭芝溶：「春香伝」を紹介するのに翻訳では意味をなさないのです。

村山知義：それでもどしどし翻訳されることを歓迎します。〔中略〕内地人が皆、朝鮮語を習ふことが可能でない以上、翻訳の「春香伝」も必要だと思ひます。

金文輯：村山先生、「春香伝」は決して感じは現はれないと思ひます。

鄭芝溶：朝鮮のものは朝鮮語でなければならぬと思つてゐるのです⁶⁷⁾。

この場面からは、日本語に翻訳された「春香伝」が、朝鮮の文学者によって強烈に否定されていることがわかる。張赫宙がこの対話の最初に提案した朝鮮文化の復興のため、「過去の朝鮮、現在の朝鮮を題材にした戯曲を内地の劇界で上演すること」と、「朝鮮語のものを内地語に翻訳」⁶⁸⁾して日本に紹介すること、すなわち、帝国日本による植民地支配の強化により、朝鮮語が公共領域から追い払われつつあった状況の下、翻訳を通じて

67) 座談会「朝鮮文化の将来」前掲、274~275頁。

68) 座談会「朝鮮文化の将来」前掲、274頁。

朝鮮文化復興を図るという声はここではまったく黙殺される。

その後、「春香伝」の翻訳にあたった張赫宙は、朝鮮の文学者によって自分に射られた矢に対してすぐに反応する。『文芸』誌上の評論「朝鮮の知識人に訴ふ」⁶⁹⁾という挑発的な一文において、座談会で「一斉攻撃を脚本に向け出した」⁷⁰⁾朝鮮の文学者らを、張赫宙は「匪賊的振舞」⁷¹⁾と受けとめていた。張赫宙は朝鮮の文学者の「春香伝」翻訳否定に対して次のような批判を与えている。

〔「春香伝」の一引用者注〕影響は非常に大きく、東宝レヴユウでは淑香伝の上演をみ、日劇ダンシングチームはシヨウ春香伝を上演し、浅草方面でも朝鮮ものが舞台にのせられるといふ風に、一時朝鮮もの時代を招来したかの観さへあるやうになつたのである。これは私としても嬉しいことであつた。が、私だけのことに限つたことではなく、在留朝鮮人と、朝鮮の諸君にとつても喜ばしいことに違ひなかつた。これは何も私の功績としてなく、われわれ民族の功績であることはむろんであつた⁷²⁾。

一方、朝鮮で「春香伝」上演が行われている最中に、京城の文友食堂において、公演関係者が不在の場で、朝鮮語で朝鮮知識人のみが参加した座談会が開かれる。ここでの朝鮮知識人による批判は一層、露骨なものであり、エスカレートした形で張赫宙の日本語版「春香伝」に対し全面的な批判を加えている。さらにその批判は、張赫宙の日本語(国語)の問題にまで広がってゆく。李源朝は「本格的な国語は、どこにもそのような国語はないでしょう。〔中略〕国語でもなく、朝鮮語でもないものになってしまう

69) 張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」前掲。

70) 張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」前掲、234頁。

71) 張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」前掲、235。

72) 張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」前掲、237頁。

た」⁷³⁾との一撃を加えている。また、前述したように、張赫宙が最も注意を払った登場人物として「各場面に活躍させた」⁷⁴⁾、「最も朝鮮的な、特異な存在」⁷⁵⁾である「房子」の朝鮮語読みについても、「国語でするなら全部国語で呼ぶべきである」(徐光霽)⁷⁶⁾と、朝鮮語か日本語かでの言語的統一を要求している。このように、作家にとって戦略的に用いたはずの表現にまでその批判は及んでいる。

張赫宙にとって「春香伝」の上演は、批評「朝鮮と春香伝」で述べているように、日本にいて朝鮮の芝居「春香伝」に接する機会がなかなか得られない朝鮮人の中でも二十歳前後の在日朝鮮人青年、そして「朝鮮人以外の人も広く知られるべく、制作した劇で、先づ日本内地人を目標とし、次に支那人乃至外国人を目標」⁷⁷⁾としていて、東京上演のために出来る限り解かりやすく描くのを主眼にしていたとアピールしていた。このように、「春香伝」の「世界文学」への参入に向けて朝鮮文化を紹介することを目指していた日本語版「春香伝」が、実際には、当の朝鮮において思いもよらぬ反発を呼びおこしたのである。

また、朝鮮の府民館において開かれ、『テアトロ』に掲載された「春香伝批判座談会」⁷⁸⁾においても、上述の座談会と同様に、翻訳された「春香伝」では朝鮮人の生活感情や風俗、習慣が無視され、朝鮮文化が乱れたものとされ、「脚色者と演出者の悪趣味」(朴郷民)⁷⁹⁾と見なされた。こうした朝鮮

73) 李源朝「新協春香伝座談会」『批判』6巻12号、1938年12月、29頁。実際の座談会は10月30日、掲載雑誌は朝鮮語雑誌。

74) 張赫宙「春香伝の劇化」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲、4頁。

75) 張赫宙「春香伝の劇化」『テアトロパンフレット第七輯 春香伝』前掲。

76) 徐光霽(司会)「新協春香伝座談会」『批判』前掲、29頁。

77) 張赫宙「朝鮮と春香伝」『京城日報』1938年10月4日付。

78) 「春香伝批判座談会」『テアトロ』5巻12号、1938年12月号、70頁。

79) 朴郷民の発言「新協春香伝座談会」『批判』前掲、31頁。

人の日本語版「春香伝」に対する批判は、「春香伝」の性格は内地語では到底^{ママ}……表現することができないという林和の言葉からも察せられるように言わば、翻訳不可能論につながるものであった。しかしながら、そもそも「朝鮮のものは朝鮮語でなければならない」(鄭芝鎔)という主張は、朝鮮文学が世界文学へつながる道を封じ込めることになる。

1938年3月、「春香伝」が日本で上演されるのと同時期に、植民地朝鮮では第3次朝鮮教育令が公布されたことも相まって、朝鮮語がいずれ消滅してしまうという憂慮は朝鮮の知識人に深く刻み込まれており、朝鮮文学翻訳不可能論もこの憂慮から発したものであることは想像に難くない。朝鮮の文学者の朝鮮文学翻訳否定は、座談会の場で対話を交わしていた村山知義が後になって述べるように、「これはただの翻訳否定論ではなく、だんだんと亡んでゆく言葉に対する愛情と執着の身悶え」⁸⁰⁾であったのだろう。

張赫宙と村山知義は最も朝鮮的・真に朝鮮的であることへの希求の実践として、朝鮮文化の復興・紹介を目指し、日本と朝鮮の文学者らとの協同、プロレタリア文化運動が関わる中で日本語版「春香伝」上演を果たしていくが、他方でそれと対峙する形で朝鮮の文学者たちの朝鮮文学翻訳不可能論が現れ、それぞれの企図がすれ違い、あるいはせめぎあう結果を生んでいく。

さらに、「春香伝」を翻訳したことにより張赫宙は、座談会「朝鮮文化の将来」において、朝鮮語翻訳不可能論を固持することが「抵抗」たり得るとする植民地朝鮮の文学者と、一方的に日本語での創作を押しつけようとする林房雄を筆頭とする帝国日本の文学者との板挟みとなり、彼が「春香

80) 村山知義「朝鮮文学に就て」『文学界』1940年5月号、161頁。

伝」翻訳で目論んだ文化の「相互交通」の可能性も宙ぶらりんになったまま、朝鮮と日本の挟間で引き裂かれてしまう。

しかしながら、その一方で、新協劇団の「春香伝」上演、そして「春香伝」上演を契機に開かれた座談会は、立場上のすれ違いはあったものの、帝国日本の文学者と植民地朝鮮の文学者が出会い、語り合った最初の交流の第一歩となったことは注目すべきであろう。

V.むすび

本稿では、日本語版「春香伝」上演における張赫宙や村山知義の活動、そして、座談会「朝鮮文化の将来」や関連する批評について取り上げた。

日本語版「春香伝」上演、そして、座談会「朝鮮文化の将来」は、それぞれの企図のすれ違いがせめぎあう中での出来事であった。また、その一方では、帝国日本の文学者が植民地朝鮮の文化状況を認識する場、すなわち他者としての朝鮮人・朝鮮語・朝鮮文学を認識する契機を提供した。また、張赫宙による朝鮮の古典「春香伝」の翻訳は、植民地支配に拘束されながらも、日本・日本人に朝鮮文化を移植することによって、朝鮮が帝国日本によって包摂されようとする「一方的な同化」を拒否し、朝鮮文化と日本文化との「相互交通」を図る試みであった。その企図の中には植民地朝鮮という主体性なるものも孕まれていたことは言うまでもない。その底には朝鮮文化を生かしたままの「協同」への可能性が刻み込まれている。

「春香伝」上演で張赫宙と村山知義らが企図した朝鮮文化と日本文化の「相互交通」は、朝鮮が「朝鮮文化」という枠組みを堅持したまま日本と対峙するという、わかりやすい「抵抗」の形をとってはいない。だが、翻訳を通じて日本文化の枠組の中に朝鮮文化の位置を確立し、また朝鮮文化

の中に日本文化を位置づけるという「相互交通」を目指すことの中には、帝国日本による朝鮮語抹殺に直面している状況の下で朝鮮文化の自主性を保護する「防波堤」⁸¹⁾の役割を果たすことも織り込まれていたといえよう。それは、時期を置いて張赫宙が「皇道朝鮮の完成」(1942年)において、「むしろ半島民の衣食住の中の長所は内地の方へ[傍点:引用者]」⁸²⁾取り入れることを訴えたことにも通じ合うところがある。**日本空間**

논문 투고일 : 2020년 10월 29일

논문 심사일 : 2020년 11월 30일

게재 확정일 : 2020년 12월 10일

81) 趙寬子「国民文学と世界文学」『思想史研究』第3号、日本思想史·思想論研究会、2003年3月、127頁。

82) 張赫宙「皇道朝鮮の完成」『中央公論』1942年10月号、169頁。

参考文献

- 張赫宙,「現代朝鮮作家の素描」,『文学案内』,1937.2.
- 張赫宙,「朝鮮人聚落を行く」,『改造』,1937.6.
- 張赫宙,「春香伝について」,『文芸首都』,1938.3.
- 張赫宙,「春香伝一六幕十五場」,『新潮』,1938.3.
- 張赫宙,小説戯曲集『春香伝』,新潮社,1938.4.
- 張赫宙,「朝鮮と春香伝」,『京城日報』,1938.10.4.
- 張赫宙,「朝鮮の知識人に訴ふ」,『文芸』,1939.2.
- 張赫宙,「朝鮮の知識層に訴ふ」,『三千里』,1939.4.
- 張赫宙・編著代表者,『朝鮮文学選集』全3巻,赤塚書房,1940.
- 張赫宙,「皇道朝鮮の完成」,『中央公論』,1942.10.
- 村山知義,「新劇団大同団結の提唱」,『改造』,1934.9.
- 村山知義,「春香伝」の築地上演に就いて」,『朝鮮及び滿洲』364号,朝鮮雜誌社,1938.
- 村山知義,「春香伝」余談—京城でも上演がしたい」,『京城日報』,1938.5.31.
- 村山知義,「朝鮮文学に就て」,『文学界』,1940.5.
- 村山知義,「朝鮮での八・一五」,『世界』,1950.8.
- 村山知義研究会編,『村山知義の宇宙』,読売新聞社,美術館連絡協議会,2012.
- 座談会,「朝鮮文化の将来と現在」,『京城日報』,1938.11.29.30,12.2.6.7.8.
- 座談会,「新協春香伝座談会」,『批判』,1938.12.
- 座談会,「春香伝批判座談会」,『テアトロ』,1938.12.
- 座談会,「朝鮮文化の将来」,『文学界』,1939.1.

- 『テアトロパンフレット 第七輯—朝鮮古典春香伝 춘향전 六幕十二場』, 테아트롭
社, 1938. 3.
- 「二十四日府民館で文芸講演会—秋田, 村山, 張氏起つ」, 『京城日報』, 1938. 10. 24
- 「「春香伝」上演が捲起した波紋—都下各紙激賞」, 月刊『新協劇団』第37
号, 1938. 4. 1.
- 信欣三, 「日記」, 「朝鮮の響き」, 月刊『新協劇団』第48号, 1938. 12. 1.
- 北橋義好編, 『新協劇団5周年記念出版』, 新協劇団発行, 1939.
- 内務省警保局編, 『社会運動の状況11昭和十四年』, 三一書房, 1972.
- 林鐘国(임종국)著, 大村益夫訳, 『親日文学論』, 高麗書林, 1976.
- 白川豊, 「張赫宙作戯曲<春香伝>とその上演(1938年)」, 『植民地期朝鮮の作家
と日本』, 大学教育出版, 1995.
- 金允植(김윤식)(白川豊訳), 「国民国家の文学観からみた二重言語創作の問題
—解放前における朝鮮作家の日本語による創作について」, 『朝鮮学報』
186号, 朝鮮学会, 2003.
- 趙寛子(조관자), 「国民文学と世界文学」, 『思想史研究』3号, 日本思想史・思想論
研究会, 2003. 3.
- 민병욱, 「村山知義연출〈춘향전〉의 공연 사회학적 연구」, 『한국문학논총』33
号, 2003. 4.
- 민병욱, 「장혁주의 일어체 희곡〈춘향전〉연구」, 『한국문학논총』48号, 2008. 4.
- 백현미, 「신민족적 전통과 동양적 전통—1930년대 후반 경성과 동경에서의〈
춘향전〉공연을 중심으로」, 『현대문학이론연구』23号, 2004. 12.
- 鄭大成(정대성), 「8・15前夜の<超境的>知識人—戦争協力と<内的亡命>の
間—朝鮮における村山知義」, 『社会文学』22号, 2005.
- 윤대석, 『식민지 국민문학론』, 역락, 2006.

- 권나영, 「어긋난 조우와 갈등하는 욕망들의 검열」, 韓国学世界化事業団延世大
 学校国学研究院編, 『일제 식민지시기 새로읽기』, 혜안, 2007.
- 서석배 · 이선영번역, 「신뢰할 수 없는 번역: 1938년 일본어 연극 「춘향전」」,
 『아세아연구』51-4호, 2008.12.
- 문경연, 「1930년대 말 신협(新協)의 「춘향전」공연 관련 좌담회 연구」, 『우리어
 문연구』36호, 2010.1.
- 문경연, 「일제말기 극단 신협(新協)의 〈춘향전〉공연 양상과 문화횡단의 정치
 성」, 『한국연극학』40호, 2010.4.
- 차승기, 「제국의 이상블라주와 사건의 정치학—무라야마 도모요시와 조선」, 『동
 방학지』, 연세대학교 국학연구원, 2013.3.
- 박광현, 「경성좌담회 재독」, 『植民地朝鮮の文学・文化と日本語の言説空間(2)』,
 国際シンポジウム資料集, 新潟県立大学, 2014.7.6.
- 外村大, 「朝鮮民族にとっての一九三八年・新協劇団 「春香伝」」, 在日朝鮮人運
 動史研究会編, 『在日朝鮮人史研究』48号, 緑蔭書房, 2018.10.
- 曹恩美(조은미), 「張赫宙作 · 村山知義演出 「春香伝」 上演(1938年)論—朝鮮人
 のプロレタリア文化運動と新協劇団の関わりの中から—」, 『朝鮮学
 報』254号, 朝鮮学会, 2020.1.

Abstract

Cultural crossing the border of the colony from the performance of the Japanese version of Ch'un-Hyang Jeon(春香傳) by Jang, Hyeok-Ju (張赫宙)

Eun-mi, Cho

In this paper focuses attention on the Ch'un-Hyang Jeon that Shinkyō, a theater company, staged as a consequence of the cooperating movement by the figures related to theatrical plays in colonial Korea and imperial Japan, and discusses the possibility of encouraging the cultural interaction, crossing the cultural border and then creating a cooperative culture in imperial Japan.

Firstly, In this paper surveys the activities of Chang Hyokchu and Murayama Tomoyoshi, the central figures of the movement, around the time Ch'un-Hyang Jeon was played in, and looks at what the play signified to them and what was the relationship.

After that, The Future of Korean Culture, the discussion meeting which was held after the Ch'un-Hyang Jeon was staged and which was cause of Chang Hyokchu's leaving Korean literary circles, in order to discuss the cultural interaction in imperial Japan.

In this paper Finally, concludes through these examinations that the translation of Ch'un-Hyang Jeon into Japanese by Chang Hyokchu was an attempt to reject unilateral assimilation into Japan, trying to include Korea in her as a part

of the land, and create cultural interaction by transplanting Korean culture to her under the colonial rule restricting his activities.

Key Words

Chang Hyokchu, Ch'un-Hyang Jeon , the discussion meeting, The Future of Korean Culture, "Japanese-language literature", cultural crossings of empire and colony

